人間関係の諸相と宗教観念からみたアカ族の集落空間について

アカ族の住居, 集落の空間構成概念に関する研究 その1

STUDY OF THE AKHA SETTLEMENT FROM THE VIEW POINT
OF THE VARIOUS PHASES OF HUMAN RELATIONS
AND RELIGIOUS IDEASStudy of the ideas of spacial composition in dwelling house
and settlement of the AKHA PART 1

清水 郁郎*, 畑 聡一**, 服部 義昭***

Ikuro SHIMIZU, Soichi HATA and Yoshiaki HATTORI

The AKHA locates settlement and forms its spacial composition in the following ways of their own;

1) The land for human settlement containing main passage ways and open spaces must be clearly distinguished by the villagers from the forest where the spirits live. So they are apt to select types of the lands for settlement which symbolize their religious belief and allow them to take the spirits away from there to the forest.

2) Traditionally, the group of the aged and the priests have always made all decision about land use, according to their own animistic beliefs. But now the conversion movement to Christianity has changed their lives and divided villagers into two groups opposed to each other. As a result of this, the settlement is also being divided into two areas, one for the animist, another for the Christian.

Keywords : AKHA in north Thailand, human relations, religious ideas,

location of settlement, form of settlement, transformation of settlement

アカ族, 人間関係, 宗教観念, 集落立地, 集落形態, 集落変容

1. はじめに

1.1 研究の目的

本論は、タイ北部に居住する山地民、アカ族の集落を対象とし、その空間構成概念の分析を、社会構造や宗教観念との関係を踏まえて試みるものである。すなわち、①役職者と長老集団を頂点とする、宗教的な階層差を含む集落内の人間関係、②集落発生から現在に至る発展の過程で、村人の行動を主導した特定の親族集団と後に移住してきたそれ以外の村人との関係、③改宗などによる宗教信仰の変化が招来させる異なる宗教信仰集団同志の力関係が、集落の立地形態や空間構成の変容にどのように反映したかを解明し、アカ族の集落がどのような構成概念によって形成されるのかを考察する。

1.2 分析の視点と方法

本論では、集落発生とその後の展開を詳細に調査した村、マイ・パッタナーの事例を中心に捉え、過去に調査した他集落の事例とともに考察する。集落選定においては、上記調査目的および調査済みの他集落との関係の把

握や比較を考慮し、しかも社会経済的な変容渦中にあると観察される当集落を調査対象とした^{*1}。分析は、最初に集落の立地形態に着目して各事例を検証した後、集落の空間構成を導き、さらに宗教観念や人間関係の変化が空間構成に及ぼす影響を考察した。また、カイエエウという祭礼を、精霊や祖霊に対する信仰に基づくアカ族の宗教観念が集落空間に表象された事象と考え、そこでのキリスト教改宗者に対する村の対応から、村人が異宗教をどのように認識するかを考察した^{*2}。信仰体系などの観念的な事項の質問に対して、インフォーマントの答えにはばらつきがみられた。このような場合は答えを集約せず、各インフォーマントが語る言葉（考え方）の総体からその事項に関する観念体系の一端を捉え、図面や観察した事象とともに全体の把握を試みた^{*3}。

1.3 調査方法

マイ・パッタナーの調査は1993年1月初めから10月末まで断続的に行った^{*4}。本論では、①役職者の世帯②旧集落に最初に移住してきた世帯③広場の周囲に居住する

* 総合研究大学院大学文化科学研究科
大学院生・工修** 芝浦工業大学工学部建築工学科 助教授・
工修

*** 芝浦工業大学建設工学専攻 大学院生

Graduate Student of The Graduate University for Advanced Studies,
M. Eng.Assoc. Prof., Dept. of Architecture and Civil Engineering, Shibaura
Institute of Technology, M. Eng.

Graduate Student of Shibaura Institute of Technology

世帯の、既婚男性を中心に聞き取りを行った⁹⁵。これに属さない村人の居住歴と血縁関係は、作成した集落図と世帯主名をもとに、数名の村人への聞き取りを時期をずらして数次行い、把握した。インフォーマントの話す言語はアカ語とタイ語に限られ、彼らがアカ語のみを話す場合はタイ語を話す村人を通訳とした⁹⁶。集落図は、予め大まかなスケールと方位を基に全体を描き、各住居と屋敷構えを実測した後に寸法を与え、補正した。

2. 調査集落および信仰体系の概要

2.1 マイ・パッターの概要

集落はチェン・ライの西およそ30kmほどの山地に位置する(写真1、図1)⁹⁷。一般に山地民の村では人の出入りが常態化しており、人口などを正確に知るのは難しい⁹⁸。1993年10月に確認した住居戸数は67、共用の脱穀所2、共用の米倉、中国人経営の商店、村人の共同出資による商店、穀物銀行、小学校、教会(カソリック)が各1である⁹⁹。マイ・パッターの発生は1983年であり、現集落の北西側の斜面下方に立地した。5年後の1987年に現集落へ移転したが、当初の集落発生に至る過程は複雑である。住人の多くは、かつてミャンマーのデシー・アカ(表記不明)に居住し、そこから一度タイ、ミャンマーの国境付近の数集落に散らばり、数年後に再びマイ・パッターで集結した(図2)¹⁰⁰。

民族、支族別の戸数は、ロミ・アカ(Law Mi^V または Loi Mi) 53、ウロ・アカ(Uv Lo^V) 11、中国人3である¹⁰¹。中国人世帯以外の村人の信仰宗教はアニミズム世帯57、キリスト教カソリック世帯8である¹⁰²。集落運営にかかわる役職者数はズマ(dzoev ma) 2、ボエモ(boe^V mawv) 1、バジ(ba jiv) 1、ニバ(nyi^V pav) 2、ズオウジョウツォハ(dzaw-eu jaw-eu tsaw^V hav) 1、ジャハン(表記不明) 1、村人によって選ばれ、役所から任命される村長が1である¹⁰³。

■図-1 調査集落の位置図

□写真-1 マイ・パッターの景観

2.2 アカ族の信仰体系の概要

(1) 祭祀形態と信仰の関係

祭祀や儀礼には陸稲育成の周期に基づく農耕儀礼や全村的な祭り、祖霊や精霊への献納儀礼などがある。日取りはアカ族の暦に従い、農耕儀礼では天候をも考慮し、集落独自の慣習や縁起にも従う¹⁰⁴。祭祀や儀礼は祖霊や精霊、またこの二者に対する信仰が絡み、祭司を中心に執行され、いずれも献納を伴うため、これらと不可分である門やブランコ、森の祠などは、アニミズムを形象するものである¹⁰⁵。精霊は森に住み、通常は集落から離反しているが、畏敬や畏怖の対象であり、従って感謝を捧げ、献納を行う対象ともなる。人々は、森林や集落の土地、水源に住む精霊からの付与というかたちで集落を形成するが、その反面、精霊によって多くの『悪いこと』がもたらされると認識する¹⁰⁶。

(2) 役職者の役割構造

アニミズムの集落は、祭祀や通過儀礼の他に、病気治療やその託宣、日常の問題解決などの多くの事項をその信仰体系内で処理する機能、すなわち役職者を持ち、自律的で閉じた社会を構成する。役職者はそれぞれに独自の精霊を信奉し、世襲によってその役職を次世代に伝えながら集落を運営してきた。

3. 集落空間の構成

3.1 各事例にみる集落立地の特徴

(1) マイ・パッター

集落はその背後に位置する尾根から北西側に向下る急斜面に立地し、傾斜が最も緩やかな場所に広場を設けている。居住域は、ドイ・チャーンからつながるようにして斜面全体に広がり、集落内を通して畑に通じる道沿いの2ヵ所に門が設けられている。移転当初はドイ・チャーンと旧集落を結ぶ道があった。集落上部の2つの門を結ぶ道、広場と集落端部を結ぶ2本の集落内通路は、移転後最初に造られた。尾根上の道と集落を通り抜けて隣接する集落や畑に通じる道は後年造られた。

・集落は尾根の西側斜面に立地する。各家の屋敷は竹垣で囲われて明確に領域が示され、竹垣の外は人や家畜の通る共用の道となる。住居はコンターに棟のラインを一致させて配列される。

住居戸数内訳	
氏族姓	戸数
ウイセツ(U)	21
ショガツ(Sk)	18
チエツ(Ch) *1	8
イヒエツ(Yp)	5
アツガツ(Aj)	3
ムツガツ(Mu)	3
セイノツ(Sy) *2	3
マツガツ(Mz) *1	2
ショツガツ(St)	1
マツガツ(Mp)	1
ムツガツ(Mu)	1
イヒエツ(Ym) *1	1
計	67

共用施設	
番号	
7	共用の脱穀所
16	共用の米倉
34	空き地
38	穀物銀行
60	小学校
70	教会
74	商店(共同出資)
75	共用の脱穀所

役職者の住居	
役職名	番号
ヌマ(ロミ)	1
ヌマ(カ)	55
ホセ(ロミ)	51
バツ(ロミ)	6
ゴバ(ロミ)	1 37
ヌマツツツハ(ロミ)	36
ツツハ(ロミ)	50
村長(ロミ)	4

注) 表中*1は加・功世帯、*2は中国人世帯。家屋番号39の中国人世帯は個人商店を営む。

集落の構成要素

- A. 門(Law^v kahv) 集落の端部に設けられる。外側には男女を型取った木偶が一對置かれ、様々な形の竹細工で飾られる。門は毎年必ず造り直される。
- B. 精霊追い出しのための門(Law^v kahv byav) 集落に入り込んだ精霊を追い出すための門で、年中行事として毎年造り直される。
- C. 広場(Pu kav) 村人たちの談笑の場であり、会議や踊りの場ともなる。
- D. 土地や森の精霊を祀る祠(Mi^v Sah^v law^v gui^v) 集落が立地する土地や森林などの所有者とされる精霊を祀る祠。周辺の森の中に設けられ、毎年建て直される。
- E. ブランコ(Lav ceuv) 年中行事のひとつであり女性のための祭りともいわれる祭礼時に生木を使用して造られる。マイ・パッターナでは祭司や長老が儀礼を行うためのブランコも造られたが、祭礼後に撤去された。村人が遊ぶためのものは翌年の同じ祭りまでその場に置かれる。
- F. 儀礼用の水場(Law^v k'awh) 稲の種蒔きの儀礼で使われる。
- G. 独身男女の集う場(Deh k'ahv) 集落の端部に設けられる平らな場所で、若い男女が歌い踊るための場所である。
- H. 貯水槽(Law^v du)
- I. 墓地(Lav bym^v)

■図-2 マイ・パッターナ集落図及び概要(1993年10月時点)

(2) メー・モン(ロミ・アカ)

1991年8月時点で、集落は大きな峰が支脈を形成する辺りに立地し、戸数34、人口280を超え、アニミズム世帯32、キリスト教プロテスタント世帯2である(図3)。メー・モンは当初リス(Li Saw)族の集落として発生し、後年アカ族が隣に移住して自身の集落を建設した。会議や全村的な行事の行われる広場の周辺が最も平らな場所であり、広場から南に下りる尾根上の道が基幹通路となる。広場から等高線に沿って北西方向にも道が設けられ、そのまま隣接するリス族の集落に通じている。当初の集落はこれらの広場や道沿いに形成された。集落発生時と調査時点での住居位置の異同についてはすべてを確認できていないが、集落発生時から役職者が揃い、彼らと男

女の長老集団がその後の展開を主導した^{*17}。発生時には、リス族の集落へ向かう道をチェン・ライの町への主要通路としていたが、車を所有する家が現れた時点でリス族の集落を通らずに直接下りることのできる道を造り、以後はその道沿いにも集落が拡大した。

1991年以降、プロテスタントへの改宗者が現れ、彼らは町へ下りる道沿いに新しい集落を建設した。1994年2月、アニミズムの集落で火が発生し、当時の戸数53のうちの37が消失した。被災後、カソリックへの改宗者が現れて被災した跡地にとどまり、集落を再建したが、アニミズムの全世帯は被災した集落を捨て、隣接する森の一部を切り開いて新集落を建設した(図4)。被災時には、以前にプロテスタント改宗者が集落を出た場合と異

■図-3 メー・モン集落図 (1991年8月時点)

■図-4 新集落の居住領域関係 (1994年3月時点)

なり、アニミズム世帯が集落を出た。理由は、火災時にアニミズムの男性が1人焼死しており、アカ族の慣習に従えば、これは悪い死と認識され、被災した集落に居住し続けることができないからである^{*18}。村人は焼死者の霊に対する鎮魂儀礼を行って集落を放棄した。

(3) パジおよびパジ・マイ (ウロ・アカ)

両集落は1991年2月に建設された。全戸アニミズムで、同年9月時点でパジには9戸、パジ・マイには8戸の住居が建設されていた(図5、6)。

パジの住人は、かつてこの同じ場所に集落を構えて居住しており、最盛期には50戸を超えていた。しかし、集落内に死者が出た時、ズマが不在であった上に、葬儀を取り仕切るボエモの能力が未熟であったことが重なり、村人は精霊の怒りを回避するために他村への移住を余儀なくされた。移住後3年を経てボエモが葬儀の方法を習

・集落間道路から分岐する小高い丘の上に立地する。尾根筋には道ができ、住居はその両側に配置される。周囲は森林に囲まれ、急斜面である。南側斜面にけもの道があり、谷を挟んだ反対の山中腹部に村人がかつて移住していた集落がある。

■図-5 パジ集落図 (1991年9月時点)

得し、新たにズマを迎えて元の場所に戻ったが、かつての住人の一部は、別れてパジ・マイを形成した。

パジは、集落間道路から分岐した尾根沿いの道を基幹通路とする。ボエモとニパ、ズオウジョウツォハの3役を兼ねる村長の住居が最も高い場所にあり、広場を挟んでその下にズマとパジの住居が並ぶ。調査時には2カ所に門が設けられていた^{*19}。

パジ・マイの8戸は小高い丘の頂上を広場とし、その周囲に円環状に配置される。ズマと村長がおり、門は2カ所に設けられている。この土地は、かつてラフ(La Hu)族が集落を構えており、彼らが集落を放棄した数年後に、アカ族が移住した。

(4) チャカム・ノーイの改宗者の集落 (ウロ・アカ)

集落は当初、集落間道路を挟んで、この集落と対峙する丘の稜線に立地していたが、1991年2月に一部の村人がキリスト教に改宗して新集落をつくり、改宗者とアニミズムの集落に分離した。アニミズムの世帯は元の場所にとどまったが、改宗世帯は現在の場所に移り、教会を中心にして新しい集落を建設した(図7)。集落は、集落間道路の脇にある小高い丘の上に立地し、中心には教会を、集落の入口には十字架の木細工を付した大きな門

■図-6 パジ・マイ集落図

(1991年9月時点)

■図-7 チャカム・ノーイ

改宗者の集落図(1991年2月時点)

を設置している^{*20}。

3.2 集落立地と集落空間の構成法^{*21}

パジではかつての集落位置に帰還して新集落を築き、パジ・マイでは他民族が残した集落跡地に自身の集落を興した。両者には、アカ族の集落立地を誘因する地形的条件があると思われる。両者はともに小高い丘とそこから延びる尾根筋に広がって立地し、丘の頂上の平坦な場所に広場を設け、周辺は森で囲まれている。メー・モンやチャカム・ノーイの両集落も同じ立地形態を採ることから、このような構成がアカ族の集落における典型のひとつと考えられる。また、尾根の両側ではなく、片側の斜面上に立地するマイ・パッターナーを、異なる立地形態の集落として挙げるができる。

チャカム・ノーイではアニミズムの集落と異なり、広場が位置すべき中心に教会が建設されている。改宗者の集落では、通常、全村的な祭りやそれに付随する踊りなどを行わない。それゆえアニミズムの慣習に沿う広場は集落形成の条件とはならないが、同じ立地条件が選ばれ、類似の空間構成がとられている。すなわち、集落の中心に位置するのは、アニミズムの集落では広場であり、改宗者の集落ではそれが教会に置き変わるが、ともに宗教観念上欠かせないものであり、それゆえに集落の空間構成にはアカ族の宗教観念が反映されていると考えられる。儀礼時の踊りなどからは、広場にアニミズム観念の表象をみることが可能であり、さらに立地間もないパジのように、役職者が広場を中心に並ぶ構成は、役職者を頂点とする集落の権力構造を空間に置き換えたものと理解することもできる。この場合、集落の中心はそれを具現したものであると認識される。また、アニミズムの集落の各事例から、門の後背地に住居を建設しないことは明らかである。すなわち、門は居住領域の端部を示し、アカ族がそれを表示する対象は周囲に潜む精霊であると考えられる。

以上の点から、アカ族の集落空間は、中心を通る基幹通路を軸線とし、その両端に設けた2ヵ所の門の内側を人間の居住領域とする構造をもち、その構造が視覚的に具現される場所を立地条件として選定するものと考えられる。旧メー・モンのアニミズム世帯の居住域は、新規参入者と分家により、広場を中心とする西、東の斜面へと徐々に広がったが、その領域は3ヵ所の門の外には到らない。また、他の事例から判断して、アニミズムの者が住居を建設する場所は常に『門のなか』であり、改宗者が居住する場所は『門のそと』である。その居住境界を集落空間との関係で図示すれば、2ヵ所の門を結ぶ軸線を直径とする円、または3ヵ所の門を結ぶ円によって示される(図8)^{*22}。メー・モンのように死者の霊を恐れ、集落を棄てるという行為は、アニミズムの観念に依拠している。厄災を原因としながらも、集落放棄に至

らしめるのは死者の霊という恐怖であり、さらにそれを役職者や長老集団が主導するという具合に、集落内の権力構造が宗教観念と絡み合い、集落の空間形成に関与するのである。

■図-8 領域を分けた居住形態

3.3 新集落における屋敷取りの方法

マイ・パッターナーでは、旧集落から現在地に移転する前に、誰がどこの土地に家を建てるか協議し、決定していた。その場合、役職者でも土地選択の優先権はなく、希望する場所を話し合いで調整した^{*23}。一方、メー・モンでは、火災消失後の新集落建設過程で、このような土地配分方法は採らなかった。各世帯の土地の決定は、県と郡の管理下で行われたくじ引きによる。予め役所側が測量し、指定した土地に番号が付され、世帯の代表者が引いた紙の番号と合わせる方式である^{*24}。このような役所の管理下に行われる土地配分方法は公平にみえるが、村人の間では、老人を頂点とする人間関係に基づいて意志の再調整が行われた。くじ引きは権力構造と無関係な結果をもたらすが、それを補正するような決定が、老人のみる夢の判断によってなされた。例えば、くじ引きでマンゴーの巨木の下の土地を得た世帯主の母親は、息子がその土地を望んでいたにもかかわらず、巨木に雷が落ちる夢をみた。これは悪い夢の範疇に入り、不幸の前兆と認識され、それを回避するために母親自身が望む別の土地の持ち主と話し合って換地した経緯がある。結果的にくじ引き通りに土地は決定しないが、この場合、悪夢をみるのは常に老人であり、村人もそれを単なる夢として否定しない。これは土地分配などの重要事項を決定する際に採られる、柔軟な意思決定のシステムである。これを、悪夢をみて決定をくつがえし、老人の願望を叶えて人間関係のバランスを保つためのシステムとみれば、年長者を優遇する人間関係や重要事項の決定を彼らに委ねてきた慣習と整合する。一方、住居の空間構成やその使い方においても、長老や役職者を頂点とする人間関係が反映されており、このような人間関係が土地分配という実際の行為を伴って集落空間の形成に関与したと考えられるのである^{*25}。

居住世帯の氏族姓内訳	
氏族姓	家屋番号
ウイセグ	5 8 9 10 11 18 19 20 27 28 29 30 33 34
ショカグ	2 4 12 13 15 16 17 21 22 23 24 36 37
イェビグ	3 14
ムレグ	6 26
チムグ	31 32
アジョグ	1
ショツグ	25
マブグ	35
7. 脱穀所	38. 穀物銀行

1987年

新規居住者の氏族姓内訳	
氏族姓	家屋番号
セヤン	39 40

1988年

新規居住者の氏族姓内訳	
氏族姓	家屋番号
イェビグ	41
ムレグ	42
ウイセグ	43

1989年

新規居住者の氏族姓内訳	
氏族姓	家屋番号
ショカグ	46 48
マブグ	44
ウイセグ	45
アジョグ	47
イェビグ	49
ムレグ	50

1990年

新規居住者の氏族姓内訳	
氏族姓	家屋番号
チムグ	51 52 53 54 55 56
ショカグ	57 58
ウイセグ	59
60. 小学校	

1991年

新規居住者の氏族姓内訳	
氏族姓	家屋番号
ウイセグ	61
セヤン	62

1992年

新規居住者の氏族姓内訳	
氏族姓	家屋番号
ウイセグ	64 67 71 73
ショカグ	66 72
イェビグ	63
イェビグ	65
アジョグ	68
マブグ	69
70. 教会	74. 商店
75. 共用の脱穀所	

1993年

年度別新規居住者の氏族姓内訳									
	1987	1988	1989	1990	1991	1992	1993	計	
ウイセグ	14(-)	-	1(-)	1(1)	1(1)	1(1)	3(1)	21(4)	
ショカグ	13(-)	-	-	2(2)	2(2)	-	1(1)	18(5)	
チムグ	2(-)	-	-	-	6(-)	-	-	8(-)	
イェビグ	2(-)	-	1(1)	1(-)	-	-	1(-)	5(1)	
アジョグ	1(-)	-	-	1(1)	-	-	1(1)	3(2)	
ムレグ	2(-)	-	1(1)	-	-	-	-	3(1)	
セヤン	-	2(-)	-	-	-	1(1)	-	3(1)	
マブグ	-	-	-	1(-)	-	-	1(-)	2(-)	
ショツグ	1(-)	-	-	-	-	-	-	1(-)	
マブグ	1(-)	-	-	-	-	-	-	1(-)	
ムレグ	-	-	-	1(-)	-	-	-	1(-)	
イェムグ	-	-	-	-	-	-	1(-)	1(-)	
計	36(-)	2(-)	3(2)	7(4)	9(3)	2(2)	8(3)	67(14)	

*カッコ内は分家戸数を表す

住居建設はアカ族歴で新年を迎えた後の乾期の数ヶ月に限られる

図9 マイ・パッターにおける集落移転以後の年次居住分布状況

4. 集落形成と発展のメカニズムについて

4.1 マイ・パッターの年次形成過程

年度別新規居住者の氏族姓内訳、および各世帯の居住歴と集落図から復元した、現在地での集落発生から調査時点に到る年次居住分布状況を図9に示した^{*26}。換金作物を作り始めた村人が町まで通じる車の道を確保することは不可欠な条件であるが、マイ・パッターではこれが集落移転の動機となり、移転2年目に尾根上の道を完成させることになった^{*27}。もともとドイ・チャーンに向かう道の近くで、なるべく平坦な土地に集落を建設するのが村人の意向であった。移転時の戸数は36、同時に脱穀所と小学校校舎（後に集会所から穀物銀行に変わる）が建設された。旧集落から居住していたウィゼグウ14戸、ショカグウ13戸の2姓が移転時にも中心になった。移転2年目に中国人2世帯がドイ・チャーンから移住した。1戸はこの集落を含む山地の元地主であり、他の1戸は商店である^{*28}。3年目は分家2、転入1、4年目は分家4、転入3であった。5年目に小学校が新築され、分家が3、ウロの6世帯が転入した。6年目には分家で2戸増えた。7年目には、分家3、転入5、集落内移住2である。広場には共同出資の商店が出店し、同時にウロの宣教師が入村して門の外側に住居（家屋番号65）と教会（同70）を建設した。集落内移住の2戸は改宗者の住居である。

4.2 集落発展のメカニズム

分家は、後に移住した中国人世帯以外は、すべて移転時に居住していた36戸から生じ、13戸を数える。一方、転入は17戸、改宗による集落周辺への移住が2戸である。集落形成過程で、特定の親族集団が一連の行動を主導したことは、先述の年次形成過程のみならず、ミャンマーを出てマイ・パッターに定着するまでの過程をみても明らかであろう。

表1は1993年10月時点の世帯主相互の血縁関係を示している^{*29}。移転時の世帯と後に転入した世帯の世帯主の間には血縁関係が存在していない。しかし、同じ氏族姓をもつ者の間では、クランのような大きな系譜に包摂される関係があり、強い共同性が発揮されると考えられる。従って仮に親族関係が特定できなくても、集落は同一あるいは複数のクランやリネージュの集合体と考えることができる^{*30}。表からは、ミャンマーの同じ集落に居住していた世帯が、分散しつつ再び集合する経緯が想起され、そのことが親族関係にない者の参入を促したとも考えられる。国境越えを伴う集落移転では、氏族姓が同じか、異なる複数の集団がそれぞれに移動して再び集まり、新集落を形成する方法がとられた^{*31}。

移転時の36戸に対する新しい住居の配列には以下の特徴が指摘される。分家は本家の近くに、転入者は集落の端部に居住する。支族、民族間の住み分けも明確であり、

□表-1 世帯主の血縁関係（1993年10月時点）

*数字は家屋番号

△は男を、○は女を表す

下付きの数字は兄弟間の関係を表すが、不明な場合は記していない

破線の矢印は新集落に移転してから調査時点までの分家関係を表す

（過去に居住していた家から、現在どこに移っているか）

⇒印は集落内の移住を表す

#印は初任教世帯を表す

家屋番号の下線はカニイで行進が廻った家を表す

「外」は集落外に居住することを示す

ウロと中国人の各世帯は多数者であるロミの居住域周辺にまとまる。宗教別の居住分布では、改宗者の居住域がアニミズム世帯の境界域から離れて門の外側に広がっている^{*32}（図10）。

このような傾向から、集落は役職者や中国人のような利益をもたらす者の参入を拒否しない柔軟な構造をもつものと推察される^{*33}。また、移転時から居住する集団の親族の参入が認められないこと（表1）、転入者の多

■図-10 民族、および支族、宗教別居住分布状況

くは氏族姓の異なるウロであることは、集落形成の時点ですでに婚姻における問題発生の可能性が考慮されていることを示唆しよう。アカ族は、同じ氏族姓間の結婚を禁止する、いわゆる外婚制を採っており、同氏族世帯が増えるほど、他氏族やウロのような他支族を受け入れるようになると考えられる。これは、転入者のうち、多数者のウィゼグウ姓とショカグウ姓の参入が少ないことによっても裏づけることができる。

4.3 カイエエウの祭礼時にみる集落空間

ここでは1993年10月の採集事例をもとに考察する。ネテウにおいて行列が廻った家は31戸である(図11)。行進は広場から始まり、最初にズマの家に入り、順次古老のいる家を中心に廻る。改宗者と中国人の世帯には廻らないが、ウロの住居は廻る。同じ信仰体系をもつ村人、という認識が支族が異なるウロに対しては働き、ロミの改宗世帯と対照をなすと考えられる。家屋番号15、22、24のショカグウの住居は、集落発生時の生え抜きであるにもかかわらず、行進は廻らない。『精霊を追い出すべき家』として認識されるのは、常に信仰を異にしないアニミズムのアカ族に限られる。

■図-11 カイエエウ時に行進が廻った家とその順路

4.4 改宗者の増大に伴う集落の変化

改宗への動きは集落形態と空間構成を大きく変える。改宗による集落内移住の開始は1993年からであり、改宗者が集落西側に居住し始めたのと時期を同じくして、宣教師が入村した。改宗世帯と居住場所の関係をみると、家屋番号16は改宗と同時に72に移住し、元の住居は共用の米倉となり、34も改宗と同時に73に移り、元の住居は取り壊された。63は転入時にすでに改宗しており、65は転入直後に改宗した。33の世帯主の弟は改宗と同時に分家して71に移住した。21と46は改宗後の動きはないが、集落の端部に位置しており、その一帯が『門のそと』と判断されたと推測される^{33,4}。今後は改宗者の増加に伴い、空間構成はさらに変化し、やがてアニミズムと改宗者の居住域に分離するものと思われる。内外から移住する改宗者は、現在の改宗世帯が居住する場所を端部として新しい居住域を南西から南東に向けて拡大し、それに

伴って現在の集落では、空き家や空き地が虫食い状に増えることが想定される。

そこで、宗教信仰の立場の違いが、集落の分離を伴う空間構成の変化にどのように関与するのかを考察したい。中国人世帯は転入者であり、アカ族と信仰を異にしているにもかかわらず、集落から排除されないが、儀礼を行う対象とはならない。一方、同じ民族の場合、アニミズムの者は受け入れられるが、改宗者は転入の時期を問わず排除される。アカ族がキリスト教に改宗した場合には排除の対象となり、キリスト教でない異民族は集落からの排除の対象にならない。現状では、村人はキリスト教を集落からの排除の対象として認識していることになる。

マイ・パッターナの事例から、アカ族と異民族、アニミズムとキリスト教を組み合わせ、民族と宗教の予想される組み合わせを列挙したものが図12である。Iは現状のマイ・パッターナであり、改宗者だけが排除される。IIとIIIはそれぞれキリスト教の異民族が参入した場合に予想される居住関係であり、IIの形態をとれば、外から参入する異民族に対しては宗教を問わず、IIIの形態をとれば、民族にかかわらずキリスト教を排除することになる。現状における同民族の改宗者を排除するという意識は、集落がアニミズムの社会として強く規定されていることを示唆している。役職者や長老集団の統一した認識が集落の統一した見解となり、それが改宗者を集落から排除する方向に作用し、集落空間の変容をもたらすのである。

*括弧は同じ集落内に共生していることを示す
横線は居住領域の分離を示す

■図-12 異民族、異宗教の共存関係

5. まとめ

5.1 アカ族の集落空間の構成方法

アカ族の集落立地の典型は小高い丘とそこにつながる尾根を軸とするものであり、加えて尾根から下った斜面に立地する事例を示した。バジとバジ・マイは焼き畑移動時の新しい集落の立地形態であり、メー・モンとマイ・パッターナは、その形態が地形に応じて発展したものと考えられた。また、チャカム・ノーイの事例からは、集落におけるアカ族の空間概念の一端が明らかになった。立地の際にはアニミズムの観念が強く働き、人間の居住領域を明示するために、精霊世界を強く意識することになる。つまり、人間の居住域を精霊世界から識別するこ

とが重視され、そのために山岳地形のなかから中心や軸線をはっきりと形象しうる地形を選定し、その両端に門を設けて内側を人間の居住域として限定する^{*35}。一方、集落を構成するのは氏族姓の異なる複数の集団であり、集落移転の際はそれらの集団を単位として移動する。集落の人間関係や社会構造も集落空間の構成やその変化に密接に関与する。役職者や長老を頂点とする人間関係や、異宗教との力関係の微妙な変化によって集落空間は変容するが、一方で村外者を柔軟に受け入れながら集落運営を維持している点も、研究により明らかとなった。

5.2 空間構成にみる異民族、異宗教との共存方法

マイ・パッターナーでは、異支族のウロが結婚可能な同じ宗教をもつ者として、また異民族の中国人が情報と金品をもたらす者としてそれぞれ参入した。しかし、同じように金品をもたらす宣教師の参入は、村人がアニミズムの観念を強く打ち出す要因になり、集落を変容させた

^{*36}。改宗者による新集落形成の動きは、現有勢力として優勢な者が少数者を排除する構造を維持しているためであるが、これはメー・モンや旧チャカム・ノイーなどで例示したように、アニミズムを社会構造の主要な柱のひとつとするアカ族の集落に共通している。

一方、そこには信仰を異にする同じ民族同士が、宗教的な対立を表に出しながらも、耕地や水源を共用するというような、現実面に則した共存方法もみられる。しかし、例えば改宗者が過半数を越えるなどのように、現状の勢力バランスが崩れた場合には、多様な人間関係やそれを投影するものとしての集落空間にも変化が生じ、新たな局面に到ると予想される。改宗者の増加に伴い、勢力バランスがどのように集落空間に影響を与えるのか、また父系社会で女性間の血縁関係がどのような役割と広がりをもって集落に関与しているのか、追って報告したい。

注

- 1) 山地開発、市場経済への参入などに起因し、山地民社会は総じて変容しているが、さらに宗教形態の差異に起因して空間的、社会的に多様に変容しつつある当集落を研究対象に適すると判断した。当集落で予備調査中の1993年1月、初めて村人のキリスト教への改宗があり、改宗者の儀礼への不参加や労働形態の変化（日曜日の休暇など）、キリスト教団体から改宗者への物品贈与などが始まり、人間関係にも微妙な変化が招来した。当集落は後述するメー・モンやドイ・チャーンと距離が近く、同じロミ・アカの集落であり、集落間では姻族関係（婚姻に由来し、個人を配偶者の親族に連結する関係）にある者も多く、3集落に渡り親族体系が展開していると観察できる。
- 2) カイエエウ (Ka^v yeh^h yeh^h -eu) はネデウ (Neh^h teh-eu) とロコンビャウ (Law^v kahv bya^h -eu) という2つの儀礼の総称で年中行事のひとつ。ネデウは1年の間に家に入り込んだ悪霊を追い出す儀式で、子どもが爆竹を鳴らし自作の剣や銃で家々を叩いて廻る。ロコンビャウは屋外に追い出した悪霊を集落の門（ロコンビャ）の外側へと追い出す儀式。一般にアニミズムは『靈魂 (soul) や精霊 (spirit) などの霊的存在に対する信仰』であるが、本論では言葉の定義上、アカ族の信仰をアニミズムとする。
- 3) 住居の空間構成と社会構造の関係分析に始まる住居の象徴性に関する研究は、主に人類学で多様に展開されたが、本論もその系譜に連なる研究である（佐藤/1989）。形態や機能の表層だけでは捉えきれない空間構成概念が住居や集落にはたらく。空間を構成する規範は文化や社会のなかのあらゆる事象（要素）と相互に関係をもち、その関係総体が文化や社会を構成する。本論では、アカ族独自のそのような指向性を事物に与える認知の体系を民族固有の世界観であるとして、それが空間構成にも表象されるという認識で考察する。
- 4) 調査期間は、1993年1/3 ～5、20～24、2/1～5、3/5 ～9、15～20、4/13 ～15、17 ～20、23 ～26、5/3～6、12～17、25 ～29、7/15 ～19、8/26 ～29、9/17 ～20、30 ～10/3、8～10、11/1 ～4。調査は清水と服部が行い、実測筆記を行った4、5月はそのための要員が別に2名同行。
- 5) ①から③で重複するのは①と③。住み方や慣習、生活、宗教観念などはこの集団に限らず無作為に聞き取り、祭祀時にはそのつど参加者から聞き取った。役職者の機能は①から、集落発生時の生活やその後の経緯は②と当初から居住する村人から、移転時の敷地選定で村人の間に生じた力関係は③を中心に聞き取った。その数は①2、②4、③3、①③に重複する世帯3、世襲制度を聞くために選んだ役職者の息子3世帯の計15である。実測戸数は②4と役職者の息子のなかの1世帯を除く10戸だが、集落図用に各住居と屋敷構えの縦横寸法を実測した。他集落の調査内容は省略したが、それらも同じ方法による。
- 6) 本論は1990年から続く山地民の住居、集落研究の一環だが、調査者がタイ語やアカ語の会話能力を身につける以前の調査（メー・モン旧集落、バジ、バジ・マイ、チャカム・ノイー）では、日本語を話すアカ族（農業研修で日本への留学経験あり）を通訳とした。調査者がアカ

語で聞き取った場合、タイ語による聞き取りと比較して詳細不明な事項があるため、基本的事項を聞く際に従うフォーマットの事項以外の聞き取り結果は用いていない。

- 7) タイ語のアルファベット表記はBANGKOK GUIDE 社作成のGUIDE MAP OF CHIANG RAI/1992 により、アカ語表記はPAUL LEWIS/1989 による。ただし、記載なきものは表記不明とした。
- 8) 旧集落を捨てての移住、他所への出稼ぎや進学など所々の理由による転出入は頻繁にあり、移動する人数（個人、世帯全員など）やその期間（数日、数週間から数年までの一時的あるいは永続的）は多様。
- 9) 独立して生計（炊事や就寝、財の保持など）を営む人の集まりを世帯とし、分家により主屋と世帯を分けた者が同じ屋敷内に居住する小屋も住居として数えた。よって、戸数67に対し、世帯も67である。穀物銀行は相互扶助を目的とした共同の米倉で、借りた米を翌年、割増で返すタイ農村の機構を取り入れたもの。
- 10) デシー・アカからの離散理由は政情不安による軍隊の村への駐留と、それに伴う強制労働や食物の搬出などで、生活維持が困難になったからであり、他集落に移住後も食料や耕地の確保が常に問題になっていたという。アカ族の暦で2a^hの年(1983)に最初の集団がマイ・パッターナーに移住し、その年から数えて5年後の Tahv la^hの年(1987)に現在地に移転した（西暦は調査者がアカ族の暦から割り出した）。ミャンマーから数年をかけて越境し、タイ国内の同じ集落に居住していたウィゼグッの3人とその近くに住んでいたマボグッの1人が移住を決意し、同様に移住場所を探していたチェムグッの1人と知り合い、1983年に旧集落に辿り着いた。5人の世帯が旧集落の土地に到着後、ズマとショカグッ6人の計7人が加わり、ズマが集落建設の儀式を行って新集落を発足させた。その年のうちに、後着の7人が居住していた集落の全員を含むおよそ30世帯が移住した。先着のウィゼグッの3世帯と後着の7世帯、またこの2つの集団が居住していた各集落の全員は、かつてデシー・アカの住人であった。初年度にポエモ以外の役職者が揃い、集落運営には支障なかった。アカ族では、役職者は必要に応じて他村から呼ぶ場合が少なくない。
- 11) ロミおよびウロはそれぞれタイ国内でみられる支族のひとつ。一般にミャンマーからの南下はウロの方が早い。
- 12) 1993年10月時点の世帯数。ここでいう中国人とは中国雲南省から南下してきた者。雲南人には、数世紀前から越境貿易でタイに到達したモスリムや1950年代に逃避してきた中国国民党の者などがおり、また現在も越境がみられ、歴史的な文化基盤や宗教は多様。当集落の中国人の宗教に関する詳細は不明だが、彼らには等しく中国人としての文化的要求がみられ、例えばアカ族の祭祀に参加することはない。
- 13) 吉田/1984 に従い役職者を区別すれば、ズマは祭司であり、ニバはシャマンである。前者は集落内の主な祭祀や儀礼を司り、世襲だが、後者は超自然的な霊格から力を獲得し、それとの接触によって病気治療の儀礼（原因や治療方法を探る）を司る。ポエモは葬式や病気治療

- とその儀礼を司り、世襲。ゾウジョウツォハは儀礼に先立って用具を揃え、段取りをつけ、儀礼の進行も管理するが、世襲ではない。バジとジャハンは世襲、前者は集落内の鍛冶仕事を、後者は鍛細工や装身具の製造、修理を担う。集落にはズマが2人いるが、後年転入してきたウロのズマは、当初からいるズマの家系で役職が世襲される限り、祭祀を司る余地はない。
- 14) アカ族の暦は12種の動物名によるアカ族のエトに従い、12日や12年を1サイクルで数える。エトにより、居住歴や年齢を測れる。
- 15) 例えば門は、人間が集落に入る際に人間についての精霊や外で蔓延する病気などの侵入を防ぐ役割を担う。
- 16) アカ族は精霊の怒りをかう人間の行為を禁忌として認識し、それに触れた場合は「悪いこと」が個人や集団に起こると考える。落雷などの特定の自然現象も精霊からの告知を意味し、精霊の怒りを静めるために献納を伴う儀礼を必要とする。他に禁忌の例として、双子の出産、出産時の母体の死、火事や自殺による異常死などがある。
- 17) 門や祠、水場の場所の選定とそこで行う儀礼の日取りなどはズマ1人では決定されず、役職者を含む長老集団に委ねられる。
- 18) 異常死による死者の魂は、しばしば動物や悪霊に姿を変えて個人や集落に厄災をもたらすとされる。
- 19) 調査時は集落形成直後でカイエウはまだ行っておらず、そのための門は設けられていない。門の数は、バジでの聞き取りによればロミは3、ウロは2というが、マイ・パッターではロミ、ウロともに集落の内外に出入りする場所に2カ所、集落に入り込んだ精霊を追出す場所に1カ所設けるといい、見解が異なる。
- 20) ミャンマーから逃れてきたシャン（Shan）族の女性がこの集落に住みつき、私塾で子供に文字や勉強を教えながら布教した。集落分離後、海外のキリスト教関係の財団から支援を取りつけ、井戸や教会、学校などを建設した経緯がある。
- 21) 本論では、集落の立地形態と集落形態を異なる概念で捉えている。前者は精霊世界との関係で規定されるような地形条件を指し、後者は立地後の主に社会集団を形象する形態を指す。
- 22) アニミズムの者でも禁忌に触れれば、集落外に居住しなければならない事態が発生する。
- 23) しかし、世帯の代表者の多くは長老であり、集落形成に関する儀礼は彼らが主導する。門や祠、水場などを決定する会議には、役職者と長老以外の者は参加できない。従って、話し合いには権力構造が反映されやすい。旧集落の建設時には、最初にズマの屋敷を村人全員で決定し、彼の住居を建設した後各世帯の屋敷を決め、次いで住居建設の日取りを決めた。
- 24) 住居1戸分の屋敷として、均等に20m×40mの土地が与えられた。
- 25) 畑、清水/1992を参照。
- 26) 住居建設は農閑期（乾期）の2月から4月の間に集中するので、居住分布の変化を年ごとに論ずるのが妥当である。新集落建設や移住時の新築では、主な建築資材として、周囲に豊富にある竹を使うことが多い。山地民は互助制度によって住居を数日で建てる。地域的な格差はあるが、一般に山地民は市場製品の所有が少なく、その意味で家屋ストックなどの廃棄再入手は容易であるといえる。
- 27) 調査地周辺の山地民集落では、近年、高地に適したニンジンやトマトなどの換金作物の栽培と出荷で現金収入をうる農業形態が広がった。そのため道路の確保が集落運営上の必要条件になっている。
- 28) 山岳部の土地は国有地であるが、中国人を含む山地民はこれを私有地と主張して売買する。用水の使用権利を含む集落の土地や耕地を、マイ・パッターは中国人から、メー・モンはリス族から買った。
- 29) 世帯主の下の子が分家していればその関係も記した。ウィゼグウの家屋番号18では、全員すでに分家したが、末子の住居61は18と同じ屋敷内にあり、末子が家を継いでいるといつてよい。29では長子が30に分家しているが、他の兄弟の所在は未確定。セイヤーンは中国人、ウロのチェムグウの51から54はボエモの家族。ウィゼグウの64と67が兄弟であり、11の親族であるというが、11の兄弟は全員死亡しており、親族関係は不明。一般にアカ族は父系出自の父方居住である。主屋には家長夫婦と分家していない息子の世帯や子供を含む未婚の男女が住むが、同じ屋敷内には、主屋から分家した息子夫婦や成年に達した息子の住む小屋がある。また長子か末子が家を継ぐが、多くの事例がこれを裏づける。
- 30) ショカグウ姓はタイ国内ではマイ・パッターとその周辺の集落にのみ居住する。また、マイ・パッターとメー・モン、ドイ・チャーンはほぼ同時期に建設されたが、デシー・アカを始めとするミャンマー時代の彼らの集落もまた、それぞれ近くに位置していた

- 31) これは、ミャンマーとの国境周辺の軍事衝突や、周辺諸国から流入する山地民を阻止しようというタイ政府の動きにも関与している。そのような状況下では小集団の方が国境を越えやすい。
- 32) 1994年初頭、村長他の数世帯が新たに改宗して、役職者、長老集団との対立が激化した。アカ族文化の保存を目的とする民間財団の仲介により、村長の住居周辺の土地を改宗者の居住域とすることで一応の和解をみたが、その後、再び長老集団が改宗者に対し強行に集落外への移住を迫り、改宗者との対立を深めている。
- 33) マイ・パッターでは、商店を営営する中国人世帯が唯一車を所有する。山地民の集落は中国人世帯を含む場合が多い。中国人は商売をしながら山地民とともに住み、自らのネットワークを使って山地民に生産や移動に関するさまざまな情報を提供する。
- 34) 領域は集落の規模にかかわらず『曖昧な幅』をもって存在する。この場合、どの地点をもって集落の端部、すなわち『門のそと』とするかは明確ではないが、宣教師が居住場所を定め、教会を建てた事実が領域を確定することになっている。
- 35) 地形の選定ではこのような宗教観念との関係だけでなく、実用の水源や耕作地、墓所となる山の位置なども考慮することは必定であり、それは役職者を含む長老集団の経験に裏づけられた総意に基づく。
- 36) 改宗者は儀礼時の金銭や家畜の供出などの負担がなくなったことを喜び、またそれを改宗の理由として挙げる。定住化の促進や植林事業など、タイ政府の同化政策は、一方で生活改善における具体性を欠く面があり、結果として山地民に危機感を与えている。

参考文献

- Bernatzik, Hugo Adolf; AKHA AND MIAO, Problems of Applied Ethnography in Farther India, Volume Two, Chapter 13 ~14, pp. 355~451, Human Relations Area Files, New Haven, 1970
- McKinnon, John and Vienne, Bernard; HILL TRIBES TODAY, Problems in Change, White Lotus-Orstom, Bangkok, 1989
- Lewis, Paul (compiled); AKHA--ENGLISH--THAI DICTIONARY, Development & Agricultural Project for Akha, 1989
- Geusau, Leo Alting Von; DIALECTICS OF AKHAZAN, (McKinnon, John and Bhruksasri, Wanat, HIGHLANDERS OF THAILAND, pp. 242 ~277, Oxford University Press, 1983)
- Hill, Ann Maxwell; THE YUNNANESE, (McKinnon, John and Bhruksasri, Wanat, HIGHLANDERS OF THAILAND, pp. 123~134, Oxford University Press, 1983)
- 吉田禎吾：宗教人類学，東京大学出版会，1984
- 豊田信幸：タイ北部山地民の家屋とその構造―ヤオ族とアカ族の事例，リトルワールド研究報告，第6号，pp. 23~66, 1982
- 竹村卓二：アカ族の系譜と父子連名―その呪術的背景について―，山本達郎博士古稀記念論叢編集委員会，東南アジア・インドの社会と文化，下巻，pp. 97 ~124, 山川出版社, 1980
- 石毛直道：住居空間の人類学，鹿島出版会, 1971
- 若林弘子：倭族の高床式住居・高床式住居の構造・人体寸法と建築，鳥越重三郎，雲南からの道・日本人のルーツを探る，pp. 82~127, 講談社, 1983
- 佐藤浩司：民族建築学／人類学的建築学（上）（下），建築史学，第12号pp. 106~132, 第13号pp. 93 ~116, 1989
- 綾部恒雄（編）：文化人類学15の理論，中央公論社, 1994
- 日本建築学会建築計画委員会：住居・集落研究の方法と課題，異文化の理解をめぐる，1988 日本建築学会・秋季大会 建築計画協議会Ⅱ, 1988
- 同上：住居・集落研究の方法と課題Ⅱ，討論：異文化研究のプロブレマティク，1989 日本建築学会大会 建築計画研究協議会討論資料集, 1989
- 清水郁郎：タイ北部、山岳民族の住居・集落に関する研究―アカ族とリス族の空間構成の原理について，芝浦工業大学修士論文, 1992
- 畑聰一、佐藤和裕、清水郁郎：アカ族の集落形態に関する考察―タイ山岳民族の居住形態に関する研究・その1―，日本建築学会大会学術講演梗概集E，pp. 27~28, 1991
- 清水郁郎、畑聰一、佐藤和裕：アカ族の住居空間と住まい方に関する考察―タイ山岳民族の居住形態に関する研究・その2―，日本建築学会大会学術講演梗概集E，pp. 29~30, 1991
- 畑聰一、清水郁郎：アカ族住居の儀礼空間に関する考察―タイ山岳民族の居住形態に関する研究・その3―，日本建築学会大会学術講演梗概集E，pp. 23~24, 1992

（1994年10月7日原稿受理，1995年3月8日採用決定）